

## 小学校での親子で学ぶ教室

—宮崎県三股小学校の実践—

神田 嘉延

A lesson to learn with parent and child in the elementary school : The practice of the Miyazaki, Mimata elementary school

KANDA Yshinobu

キーワード：小学校での親子教室，地域と学校の連携，三股小学校の教育実践，農村地域の教育実践，小学校での公開講座

**概要：**本論は、学校の教室における親の学習参加の役割を分析した。このケースは、宮崎県三股小学校である。この実践は、家族とコミュニティの相互協力である。この学校は両親が子供たちと一緒に学ぶ教室をつくった。この教室の講師は地元の人である。学校の先生は、コーディネーターの役割を果たす。この教室は、子ども達の大好きなコースを選ぶ。ここでは、子供の創造意志も、素晴らしかった。親は子供と一緒に学ぶ。親は、同時に学ぶための喜びを経験した。親と学んだことが子供の学校での学習に影響していくことが証明された。

### はじめに

本稿では、三股小学校での保護者と児童が共に学校の教室のなかで学ぶ実践事例をとりあつかった。ここでは、学校、家庭及び地域住民の相互の連携協力という視点から、その実践の成果と課題を分析していくことを目的とするものである。

教育基本法第13条では、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力の必要性が次のようにうたわれている。「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努めるものとする」ということである。

これは、学校の管理運営から学校での教育実践まで、学校と家庭や地域住民の役割と責任を相互に理解することを強調したものである。

現代の学校の教育実践は、家庭や地域住民との連携と相互協力を重要な課題としているのである。しかし、学校教育の実践において、教師の専門性の尊重から家庭や地域住民の連携と協力の展開には、多くの課題を残しているのが現実である。

義務教育は「各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、

国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的とする」という教育基本法の第5条の精神にのっとっている。そこでは、社会的において自立的に生きる基礎を育むことを教育の目標としている。

学校教育法は、義務教育の目標を更に、10項目にわたって規定している。この10項目の教育目標を達成するには、学校内の教師だけの専門性だけの教育実践では実現できないのである。

第1の項目は、社会的活動の促進により社会の形成者として自主、自律、協同の精神の養成である。

第2の項目は、自然体験の促進により環境保全の寄与する能力の育成である。

第3の項目は、郷土の現状と歴史の正しい理解から伝統文化の尊重と他の文化の尊重により国際平和の涵養を育むことである。

第4の項目は、家族と家庭の役割、生活に必要な衣食住の基礎的な理解。

第5の項目は、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的能力の養成。

第6の項目は、生活に必要な数量的関係を正し

く理解し、処理する基礎的な能力を養うこと。

第7の項目は、生活にかかわる自然現象について、観察及び実験を通じて、科学的に理解し、処理する基礎能力を養うこと。

第8の項目は、健康で安全で幸福な生活のために必要な習慣を養うとともに、運動道を通じて体力を養い、心身の調和的発達を図ること。

第9の項目は生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸その他の芸術についての基礎的な理解と技能を養うこと。

第10の項目は、職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと。

以上の10の教育目標の項目どれひとつみても学校内だけで教育目標を達成できないことは明らかである。

小学校教育では学校教育法第31条において、教育目標達成のためには、体験活動を特別に重視する必要性を規定している。体験活動の教育目標達成には、家庭と地域住民等の連携と協力が不可欠である。

さらに、教育や子どもの関連法において学校と家庭及び地域住民との連携、協力関係の重要性が指摘されている。例えば、食育基本法である。それは、平成17年に制定された。

この法では、子どもの体験的学習の重要性を次のように指摘している。「子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも「食」が重要である。今、改めて、食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食育を実践することができる人間性を育てる食育を推進することが求められている。……国民一人一人が「食」について改めて意識を高め、自然の恩恵や、「食」に関わる人々の様々な活動への感謝の念や理解を深めつつ、「食」に関して信頼できる情報に基づく適切な判断を行う能力を身に付けることによって、心身の健康を増進する健全な食生活を実践するために、今こそ、家庭、学校、保育所、地域等を中心に、国民運動として、食育の推

進に取り組んでいくことが、我々に課せられた課題である」と。食育基本法では、食育の国民運動を推進するために、学校と家庭及び地域社会の連携と協力が大切としている。

また、環境教育関連の「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」でも同様に学校教育と地域社会の教育との連携、協力が次のように述べられている。

「国、都道府県及び市町村は、国民が、その発達段階に応じ、あらゆる機会を通じて環境保全について理解と関心を深めることができるよう、学校教育及び社会教育における環境教育の推進に必要な施策を講ずるものとする。……学校教育及び社会教育における環境教育の実施の際に、環境の保全に関する知識、経験を有する人材が広く利用活用されることとなるよう、適切な配慮をするように努めるものとする（第9条）」。

食育や環境教育の学校教育実践は、社会教育との連携はもちろんのこと、市町村や地域住民との協力関係のもとに実施していく必要がある。

学校の教育課程において、家庭及び地域住民等の相互の連携協力をどのように入れていくのか。このことは、学校経営において大切な課題である。この問題について中央教育審議会の答申は積極的に学校と地域社会の連携を積極的に述べる。

「今後の学校の管理運営のあり方について」として、中央教育審議会は、平成16年3月に答申を出しているが、そこでは「学校の管理に関して、自主的・自発的な取り組みを促進し、開かれた学校づくりを推進する観点から「学校の裁量の拡大」、「地域との積極的な連携・協力」、「学校外の活力の導入」をうたっている。そして、「各学校が国民の期待に応えて、創意工夫を生かして、学校の担うべき役割を十分に果たすことができるよう、学校の管理運営のあり方をより柔軟で弾力的なものとする視点」が強調されている。地域社会との関係で学校運営の柔軟化が大切なのである。

学校は、家庭や地域との関係で柔軟で弾力性をもって地域に開かれた学校運営が期待されるようになっていくことを中央教育審議会は、日本の今後の学校運営の基本指針として答申しているのである。

学校と地域、家庭との連携について、子どもの生活と教育実践の大切さを論じたジョン・デューイは学校での調理室や織物作業室を例にとりながら「学校と社会」の著作のなかで次のようにのべている。

「子どもは家庭で学んだ事柄を、学校にもち運び、それを学校で利用することができるし、そして学校で学んで事柄を家庭で応用する。これらのことは、学校の孤立化を打破し、学校と家庭を結びつけるうえでの二つのきわ立って重要な事柄となっている。一つは学校外で子どもが得たあらゆる経験をもって学校に来させることであり、いま一つは子どもの日常生活で直接に役立ちそうなものをもたせて学校から帰させるということである」。(1)

調理室や織物作業室での教育実践が学校と家庭を結びつけて、学校の孤立化を打破しているとのべている。

学校外で得たあらゆる経験を学校にもってこることができる。また、学校で得たことが子どもの日常生活に役にたっていくということである。

さらに、学校の食堂や調理室、作業室が地域の産物、地域の生活、それと結びつきの諸科学の学習に大いに役に立つことを次のようにデューイは語る。

「調理室にもち込まれてくる食材はすべて、その産物である。それらのものは、土壌から生じ、光や水の影響を受けて育てられ、地方的なきわめて多彩な環境を象徴的に表しているのである。ガーデンからより大きな世界へと広がるこの関連をとおして、子どもは諸々の科学への学習へと、最も自然なかたちで導かれていくものである。

これらのものは、どこで作られたのか、これらのものが生育するためには、何が必要とされるのか、その作物と土壌との関係はどうか、気候条件の違いによる作物への影響はどのようなものか、などといった問題が生じ、学習の対象となるのである。

・・・外部の世界との同様な関係は、木工の工作室や織物作業室でも見つけられるのである。これらの作業室は、そこで使用されるさまざまな材料を生産する資源としてのカントリーと結

びついでおり、また、エネルギーを応用する科学としての物理学と結びついでおり、さらに、商業や流通とも結びつき、また、建築や装飾の発達における芸術とも結びついでいるのである。

それはまた、技術系や工学系の学部という側面でも大学と密接に結びつき、実験室およびそこでも科学的方法や成果とも、密接な関連をもっているのである」。(2)

デューイにとって、学校の作業室は、カントリーと積極的に結びついでいく役割を果たすとしている。

とくに、エネルギーを応用する物理学、商業や流通、建築や装飾の発達における芸術など多面的な分野の学問と結びついでいくことを説いているのである。

学校と家庭・地域との連携は子どもの実際生活と結びついた教育実践においては、不可欠なことであり、学んだ成果が生きた学力として実際生活に役にたっていくことを強調しているのである。

以上のように学校と家庭・地域との連携は、学校教育実践の本質に関わることであり、このために、教育基本法13条に規定されていることであり、子どもの生活との関連で教育を重視する思想家も学校と家庭・地域の連携を積極的に問題提起しているのである。

本稿は以上の視点から、学校教育実践の本質を家庭や地域との関連でみていくうえでのひとつの過程として、三股小学校での親子で学ぶ教育実践の取り組みを分析するものである。

## 1. 三股小学校の概略

三股小学校は、霧島山麓都城盆地の三股町の役場の近くにある地域の小学校である。明治5年に創立された歴史のある学校として記録されている。

三島通庸が明治2年に都城地頭として赴任し、三股と庄内地区の開墾と学校設置に尽力された。教育をもって開拓の大本とする考えからである。三島に対する三股開拓の碑には「学校ヲ設ケ教師ヲ鹿兒島より聘シテ託スルニ子弟ノ教育ヲ以テ本村ノ育英ノ基実ニ此ニ存ス」と早くからの学校建設の尽力が記されているように、学制以前に三

島の努力によって、近代学校の礎石がつくられていた。したがって、三股小学校の創立は、三島の地頭赴任による明治2年の学問所の成立ということもいえる。つまり、近代の学制以前に学校の礎石がつくられたのである。

もともと三股には、郷中教育が盛んであった。その後明治になって学舎として稲荷神社内に龍雲館が設置された。また、一般の青年を対象にしての正道館と呼ばれて活動がされていたものである。つまり、三股には、明治以降に郷中教育や若者組の継承として、2つの学舎があった。

地域の心身鍛練の教育が伝統的に盛んな地域である。さらに、三股の地域振興との関係で、学校の果たした役割は、小学校に敷設された実業補習学校の発展である。

明治44年には実業補習学校を各小学校に敷設し、大正12年には、全村で447名の生徒をもつにいたった。そして、大正14年には各小学校の実業補習学校を統一して、三股実業公民学校になっていくのである。小学校の付設の実業補習学校から地域で独自に青年の実業学校を発展させたのである。

三股は、義務教育としての尋常小学校の教育だけではなく、中学校にいけない子弟の多くが、実業補習学校、実業公民学校に通っていたほどに教育熱の高い土地柄であった。

以上のように、三股小学校は、地域の人びとに支えられての歴史と伝統の学びの気品と風格もっている学校である。

三股小学校の現在の児童の2010年の在籍数は、1年生69名、2年生67名、3年生78名、4年生79名、5年生82名、6年生90名、なかよしなど4名、合計469名である。

職員数は30名で、普通学級15クラス、なかよしなど2クラスである。

三股町では地域社会と学校との交流を積極的に展開している。学校での体験学習には、地域のお年寄りからの昔話を聞いたり、地域のひとから伝統芸能の指導を受けたり、農業体験学習に地域の協力を得たりしている。

三股町は、県民所得の平均に比して86%（2007年度所得）と、決して経済的に恵まれた地域では

ない。しかし、人口は都城市の住宅地として、増大している。1989（平成元）年20473人から2009（平成21）年は、25197人である。農業就業人口は、1148人（2005年農業センサス）150日以上就業655人。町民所得の内訳は、農林業5.4%、サービス業21.3%、運輸通信11.4%、不動産業15.4%、卸小売り9.2%、製造業9.5%、建設業7.5%、政府サービス（公務など）11.8%などとなっている。また、賃金・俸給所得66.5%である。（2007年度町民総生産所得）。地域は畜産、お茶、野菜を中心として農業の盛んな土地柄である。

2010年の三股町ふるさと祭りは11月13日、14日に6万人の町民が参加している。この行事は、地域産業と文化発展を目的としたイベントである。

ふるさと中央広場にはメインステージがつくられ、日頃に練習した歌や踊りが披露され、人間早馬競争などの地元の伝統的な競技である木製そりにジャンカン馬に見立てたバルーンを積み、倒れないようにゴールまで走る様子は、地元の人々にとって笑いとお楽しみのものであった。

体育館では3000点に及ぶ絵画や書道、創作物の展示品が集まり、町民の日頃の文化活動の高さを示している。このように、地域の連帯をよぶ社会教育活動が積極的にに行われている地域である。

また、各学校では、五穀豊穡を祈願しての伝統的な郷土である棒踊りや奴踊りが子ども達によって、練習されている。

三股町では、豊作を祈願する農民の伝統的な郷土芸能が学校をとおして、継承されている。この伝統的な郷土芸能は、地域の人々が学校を通して子どもたちに教えているのである。これらの活動は、農業地帯であるからこそできるのである。

ここには、学校教育での教師の地域に根ざした教育実践の姿勢が、子ども達と地域の大人達を結びつける役割をもっている。この条件が三股小の地域にはそろっていることを見逃してはならない。

地域の農産物を学校給食に提供しているのも三股町の特徴である。地域産物を利用した「地場農畜産物利用拡大事業」として、学校給食からはじめている。三股町としての食育活動のなかに学校給食を大切にしている。三股小学校は、この重点

活動としての食育活動に力を注ぎ、学校と家庭、地域の連携による食育活動として弁当の日を設けている。

弁当の日は、子どもが親から援助を受けながら自分自身で弁当をつくり、学校にもっていく。弁当を囲みながらみんなと一緒に食べる活動をしている。

食に関する学校教育実践では学校と家庭、地域社会との連携を積極的に展開している。学校と家庭の連携として、弁当の日を設けていることは、学校給食とは異なって、家庭での親子の関係を学校教育のなかに実施していく試みである。

学校側は、定期的に子どもの成長にとって基本になる栄養などの食育だよりを発行している。また、独自に学校給食だよりも発行している、学校給食試食会を実施したり、家庭教育学級で食のことを学習したりしている。

三股の農産物を積極的に学校給食に活用するように三股の農産物の日を設けて、地場産を学校給食に取り入れて、児童たちに郷土の産物と、地域の伝統的な食文化を理解させている。このように、食をとおしての学校と家庭・地域の連携を展開しているのも三股小学校の特徴である。

三股町では、町単位に教育研究所を小学校と中学校の教諭でつくり、教育研究などを行っている。地域みんなで子どもを守り育てようとお母さんと子どものふれあいの場づくりとして、ぶどうの会などのサークルが自主的につくられている。

そこでは、絵本読み聞かせ、紙芝居、手遊び、人形劇など多彩にグループ活動が行われている。

ところで、三股小学校の学校経営の基本方針は、「21世紀に生きる、心身ともに健康で知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな実践力のある児童の育成に努める。家庭・地域社会と一体となって取り組み、児童が楽しく生き生きと諸活動に励み、自分のよさを十分に発揮できる学校をめざす」といように家庭・地域社会と一体となって教育実践をしていくことを学校の基本方針にかかげている。

学校での研究主題は、「進んで伝え、豊かに関わり、高め合う児童の育成～望ましいコミュニケーション能力を育成するための学習活動を通し

て～」としている。

つまり、研究主題は、大都市との交流、情報化、国際化という新たな時代に、生きる力の基礎学力として、コミュニケーション能力を大きな課題にしている。

三股町の地域特性は、十分な説明がなくても、地域の人びとが相互扶助のもとに学校に対しても協力的で、協調をもって地域活動をする気風をもっている。

このことは、相手に対して理解してもらった表現能力や伝え合う能力が都市化、情報化、国際化していくなかでの異文化との接触のなかでは行き違いが発生する。

伝統的な気風ばかりではなく、新たな時代に即応したコミュニケーション能力が地域社会に求められているのである。

三股小学校側はこの研究をはじめにあたって地域社会の状況を次のように認識している。

「三股町は、自然が豊かで、素朴かつ協調的な人々が多い。町民は、古くからの知己を得ており、十分な説明や表現は省略されることも希ではない。このような理由から、よく聞き、伝え合い、話し合うということがやや軽視される傾向にあるようである。

児童においても、地域社会においてあいさつや言葉遣いなど、同様の傾向が見られる。本校児童は、まじめで素朴、協力的である。

その一方で、気持ちや考えを相手に伝えたり、相手意識をもって話を聞いたりするという習慣や経験が十分に定着しておらず、学校生活に好ましくない影響を及ぼしている」と見ている。

この学校側の地域社会の評価は、農村社会にみられる閉鎖性の問題である。農村社会では、都市的な複雑な人間関係の中で、きちんと意志表示しなくても生きてこれた。ここでは、豊かな表現力をもって交流していくことの育ちが不十分であった。この農村社会の伝統性が今も残っているのである。

この意味で、積極的に小学校教育としてコミュニケーション能力を家庭や地域社会もまきこんで実践していくことは大切なことになるのである。

## 2. 小学校での学校参観日を工夫した親子ふれあい教室のとりくみ

三股小学校では、保護者の授業参観日を子どもたちの授業の様子をみてもらうということだけではなく、積極的に親子が自主的に学習に参加できるような催しをしている。この試みは、学校と家庭・地域社会の連携という視点から学校の参観日の行事ができないかという発想である。

従前の単に親や地域の人が子どもたちの授業の発表をみるということではなく、保護者や地域社会の人が主体的に学校に参加できないかという工夫である。

学校の教員のみによって授業参観をして、その行事に保護者や地域社会が評価していくということではなく、保護者や地域社会の人が学校に主体的に参加していく工夫のひとつとして企画したものである。

これは、子どもと親が同じ興味のテーマをもって、自己実現していこうという試みである。この催しは、三股小学校フェスタと称している。

この日は、1時間目と2時間目の授業は、保護者に授業での子どもの学習の様子をみてもらい、公開講座として親子で自由に選択してもらう学習時間を2時間ほど設定している。

そして、弁当の日として、家で子どもたちがつくったものをクラスのなかで、みんなと一緒に食べて、締めくくるといふ催しである。

2010年が初めての試みである。実施の日は、11月7日の日曜日であった。この日に、保護者が授業を観察するのは、1年生から3年生までである。授業科目は、国語と算数で、4年生は、国語と社会であり、5年生は、国語と総合、国語と社会、6年生は、総合と算数、総合と社会、総合と社会である。全般的に国語の授業を保護者に重点にみてもらうような企画であった。

学校参観日は、三股小学校の多くの保護者が集まるフェスタの日だけではなく、4月、5月、7月、9月、12月、1月、2月と学年・学級PTAなどの保護者との懇談があるときに気軽に授業をオープンにしている。

家庭と学校との連携を強めていくために、学級担任と保護者が児童についての諸問題を積極的に話

し合い、お互いの理解を一層確かなものにするために保護者と教師との懇談を定期的に行っているのである。

また、児童の家庭での様子や児童が暮らす地域の状況を知るために、教師は家庭訪問をしているのである。

ところで、三股小学校のフェスタの特徴は、学校の公開講座としての親子で学ぶ教室である。この教室は、2010年度は、21の講座が用意されたのである。

講座の内容は、表1に示すとおりである。

第1希望から第6希望まで児童に書かせて、人数の調整をしている。講座の人数の割り振りには教員たちも苦勞している。できる限り児童の希望にかなえられるように配慮をしたが、実際は定員があつて、第1希望どおりにはならなかったのである。社会人による公開講座の講師との相談によって定員を決めて、その定員に即して、学年ごとに平等になるように、あらかじめ学年ごとの定員を定めて、児童から受講したい講座希望をとっている。

ところで、講座内容を決めていくうえで、最初は、講師探しからしなければならなかった。2010年度が最初のフェスタであったので、どのような公開講座が可能であるのか、講座を指導できる講師がいるのかということは全くの手探りの状況から始めなければならなかったのである。

三股町の公民館講座や都城市のサークルの講師名簿をみながら親子で学ぶ公開講座の講師探しをはじめたのである。まずは三股町の社会教育の講座一覧から講師探しをしたが、十分にみつかることができなかったので、都城市のサークル講師の一覧から講師の候補者を探していったのである。都城のサークル講師名簿から9講座の講師が決まり、楽しい科学は高専からの派遣、のびのびキッチン は給食センターからの講師派遣であった。

講師のなかで元教員であった人が7名ということであった。21の講座の講師の住所は、三股町が、7名である。三股小学校の親子で学ぶ公開講座は、三股だけの人材だけでは講師選びが出来なかったのである。また、親子体操やエコクラフトの講師は宮崎市から来てもらっている。

表1 親子で学ぶ講座の内容

番号	講座名	金額・円	定員	対象学年	受講条件	準備
1	親子体操 レクレーション	0	31名 (32名)	全	子どもだけ参加 OK	運動できる服 装
2	かわいい小物づくり	100	15名 (15名)	四年生以上	子どもだけ参加 OK	はさみ
3	きんちゃく袋づくり	300	20名 (17名)	全	1年生～四年生は 親子で参加が望ま しい	裁縫道具
4	毛糸でお掃除の 用具づくり	300	20名 (18名)	全	1・2年生は親子で 参加が望ましい	はさみ・木工 用ボンド
5	折り紙で遊ぼう	50	26名 (28名)	全	1～4年生は親子 で参加が望ましい	折り紙
6	ちらし細工	0	25名 (22名)	全	1～3年生は親子 で参加が望ましい	なし
7	遊び心で楽しむ書	0	16名 (16名)	3年生以上	3・4年生は親子で 参加が望ましい	習字道具
8	切り絵でお手紙	50	20名 (17名)	全	1～4年生は親子 で参加が望ましい	カッターナイフ
9	楽しいリリアン編み	300	20名 (20名)	全	1・2年生は親子 で参加が望ましい	牛乳パック(一 リットル)は さみ
10	リースづくり	100	20名 (19名)	全	子どもだけ参加 OK	飾りたい材料
11	お茶一服どうぞ	0	20名 (21名)	全	子どもだけ参加 OK	なし
12	ブラバン工作	100	25名 (30名)	1～4年生	子どもだけ参加 OK	油性カラーペ ン
13	押し花で楽しむ	150	22名 (21名)	全	1・2年生は親子 で参加が望ましい	なし
14	エコクラフト	100	21名 (20名)	全	1・2年生は親子 で参加が望ましい	はさみ洗濯ば さみ、ボンド
15	フィッシュ カービング	500	25名 (24名)	全	1～4年生は親子 で参加が望ましい	ポスターカ ラー(白と青)
16	楽しいアロマ クラフト	300	21名 (23名)	全	1・2年生は親子 で参加が望ましい	なし
17	楽しい科学	0	26名 (26名)	全	1・2年生は親子 で参加	針金ハンガー と毛糸長めの 布
18	竹細工	0	25名 (25名)	全	親子で参加が望ま しい	なし
19	のびのびキッチン	100	25名 (25名)	全	親子で参加	エプロン 三角マスク
20	コンピュータで 作ろう	0	20名 (20名)	4年生以上	親子で参加が望ま しい	なし
21	発明クラブ	250	20名 (19名)	4年生以上	親子で参加	はさみ

学校と地域の連携による公開講座の企画であったが、講師の人材という側面からみるならば、三股町以外の人材に頼らざるをえない状況であったのである。児童が親子で楽しく体験しながら学校内で学ぶという講座の企画に地域の人材の活用と、地域での講師養成が課題になっている。講座内容をより地域に根ざしながらの長期的な工夫も必要になっている。

当日は、親子、または祖父母と、楽しく公開講座を受けており、子どもたちの目の輝きばかりではなく、親や祖父母も真剣そのもので講座に参加していたのである。普段あまり学校にみえない父親の参加も目立った。講座の最後に、それぞれの教室では親子で作った作品を紹介し、簡単な感想を発表している。

子どもたちへの講座参加の募集の条件に、子どもだけの参加でもよいという講座もあったが、ほとんどが親や祖父母などの参加によって楽しく公開講座を受けていたのが実態であった。

当日は、公開講座を盛り上げるためにポスターを教員達の責任でつくり、地域の人たちが気軽に参加者できるように工夫をしていた。

それぞれのポスターのなかみを紹介すると、「親子体操レクレーション」は、親子体操、ヨガとして、「親子で楽しく体を動かしたり、ほぐしたりなど、ゲーム感覚で参加できます」と4枚の日頃子どもが楽しんでいる様子を写真で紹介している。子どもだけの参加、大歓迎。料金は無料。

「のびのびかるかんキッチン」は楽しくお菓子を作りましょうと、大きな写真でかるかんのなかみもわかるように、かるかんを割った写真の案内をつけている。参加費材料代100円参加人数、親子あわせて54人までとしている。

「コンピューターで作ろう。親子で一緒に作ろう」は、いろいろな目的に仕えるコンピューター！学習の時、ゲームをする時など、使い方たくさん!!この講座ではコンピューターの機能を使って自分だけのカレンダーや名刺を作ると子どもがコンピュータをしているイラストと花の絵柄をつくって宣伝している。

発明クラブ(からくり工作)は4年生から6年生までとしている。ポスターには、★ふしぎやふ

しぎ!ひとふりすると、絵がパタパタと変わっていくおもしろくふしぎな「木のおもちゃを」を作る。どんなしかけになっているのかな~?ドラエモンが消える?!と、絵が変わっていく6枚の写真と、都城少年少女発明クラブの指導者の教えている様子の写真を大きくはりだして宣伝している。

「楽しい科学」は都城高専の先生が講師になり、カラフルなスライムを作ったり、シャボン玉で遊んだり、楽しいよ~。用意するものは、はりがねハンガー、毛糸または長めの布、費用は無料。子どもたちがスライムを作っているところを写真で紹介。ぬるぬるしたカラフルなスライムがばらばらにしてもすぐにくっついていく、いろいろな形を自由につくれる様子をアピール。ほう砂の薬品を使つてのスライムの化学的な反応を子ども達が遊びながら理解させる科学教室である。水8分目をフィルムケースに入れて、絵の具で好きな色を混ぜて、ほう砂の薬品を2分入れてよくかき混ぜると不思議にもスライムができあがる。子ども達は不思議さと自由に自分の思う形を作りながら遊ぶ姿。また、ジャンボシャボンで体全体で形をつくりながら遊ぶ姿から科学の楽しさを写真で紹介している。

「おりっこ講座~おり紙をする講座だよ」。「おり紙」とは、紙を折っていろいろなものを作る遊び。昔から伝わっている遊びの一つです。準備するものおりがみ。ポスターには、8種類のおりがみの作品を貼って宣伝している。

折り紙は、算数をはじめ学校教育の教材にも応用でき、子ども達が親子で折り紙の楽しさを体験してもらえればという教師側の願いである。

「切り絵でお手紙」は、色画用紙を型どりにカッターナイフで切りぬいてはがきにするものである。インテリアとしてかざってもすてき。こんな作品ができますと作品3点をポスターに貼り付けて宣伝している。保護者同伴が望ましい講座。

楽しいリリアン編み-自分だけのステキなマフラーを作りませんか、牛乳パックを使って、2mほどのマフラーを作る。「編みものって難しそうだな・・・」と思っている人でも大丈夫!!冬に向けて、自分だけのマフラーを作る。牛乳パッ

クの上の方に8ヶ所にはさみをいれて写真で、牛乳パックはこのように使うと紹介。また、編んでいる途中とマフラーとして出来上がっていく写真をのせている。費用300円、リリアン編みに適した毛糸を当日販売するとしている。準備するもの牛乳パック、はさみ、のりと。

「かわいい小物作り」と、アンパンマンなどのイラストを入れて、かわいい物づくりの宣伝。動物やキャラクターなど。持ってくるものはさみ、お金100円。学年は4年生から6年生。

「リース作り」かずらなどのリースにボタンやリボン、松ぼっくりで飾りをつけ、自分だけのリースを作る。費用100円。持ってくるも自分で飾りたいもの。ボタン、リボン、松ぼっくりなどの飾り。リースの完成した作品を写真に貼ってポスターを飾っている。

「きんちゃくぶくろ作り」布できんちゃくぶくろを作る。A4サイズのノートが入るくらいの大きさで、布がらを擬人化したイラストをつくらたりする。イラストでみんなでいっしょに楽しく作ろうをスローガンにしている。もってくるもの、ぬいばり、まちばり10本、糸切りばさみ、費用300円。

「そうじどうぐをつくらう」は毛糸とわりばしではたきをつくと完成を写真で紹介している。材料費300円。もってくるものはさみとボンド。

「エコクラフト」は、エコバンドをつかって、かごを編む。かんたんにできるとアピールしている。小物入れや鉛筆立てができる。1年生～3年生は親子で。4年生以上は子どもだけでもOK。材料費100円。もってくる物、はさみ、せんたくバサミ10コ、ボンド。完成したエコクラフトを4つの写真で紹介したポスターを張り出している。

「押し花で楽しむ」～押し花を使ってすてきなかざりを作ってみませんか。自分たちの身近にある草や花。よく見るといろいろな色や形をしている。この講座では、押し花にした花や葉をうまく組み合わせて自分だけのオリジナルはがきやかざりを作る。すてきな作品を紹介。コースター、しおり、はがきをポスターに貼り付けて宣伝している。

押し花は心を癒してくれるアートの側面と、自

然観察として、環境教育や理科の勉強にもつながり、子どもが親子で楽しみながら理科の勉強に関心をもってもらえればという教師側の期待である。

「チラシでかざりを作ろう」。チラシで花瓶、チラシでかご、チラシでバスケット、チラシと牛乳パックでリモコン入れ、チラシで紙ちょう、チラシぞうりの作品の写真が広告されている。チラシを使っていろいろな物が作れるとなっているが、実際は、シャンデリヤ、カベかざりなどとなっている。

「プラ板工作」は、1年生から6年生までだれでもかんたんに、プラ板ですてきなアクセサリーが作れると、いろいろなキーホルダーの作品を写真で紹介したポスターをつくっている。もってくるものは、油性ペン、はさみで材料費100円。

誰でも簡単に工作できるプラスチックの板ということで、理科の実験に失敗をくりかえしながら、ほしいものを手作り工作できるものである。出来た作品は自分自身のもので、ほかにはない独創的なもの、子ども達の創作意欲を醸し出すものとして利用されるものである。プラバン工作は、子ども達に人気のある講座で、定員を大きく超えたもので30名の子どもが参加していたのである。親子で楽しみながら、いろいろな作品をつくっていたのである。

「遊び心で自由に楽しむ書」は、左手で自由に好きな言葉を書いてみませんか、広告している。失敗を恐れず始めてみることだ何事にも。書の写真は、夢をもって生きているかね。いまはどんなにみじめでも人生には必ず花咲くその日がきくと来る事を信じてと、講師の先生の迫力ある書体を写真で紹介している。

以上のように三股小学校の公開講座として親子で楽しむ学びを学校の教師達の準備によって、見事に学校ぐるみ地域ぐるみの取り組みで成功させているのである。

講座によっては、学校の授業と深く関わって、子どもの学習に直接に結びついていくものと、子どもが興味関心をもって将来の自分の創作、芸術性などの情操、感性の発展に繋がっていくものなど企画は様々であったが、子どもが学校で教師の

準備のもとに親と一緒に学んでいく行事を作ったことは、学校と家庭、地域社会の連携を子どもの学習という視点からみていくうえでも大きな意味をもっているのである。

### まとめ

本論は、宮崎県都城圏三股小学校での保護者と児童が共に教室のなかで学ぶ実践を分析したものであった。この実践は、学校、家庭及び地域住民の相互の連携協力ということで新たな学校教育実践のとりくみであった。この実践をとおして、子ども達が楽しく授業に取り組んでいることが明らかになった。また、自分で好きなコースを選ぶ教室は、子どもの創作意欲も旺盛であったことが証明された。親も子どもと一緒に学ぶことで、子どもとの共感と同時に自ら学ぶ楽しさを味わったのである。

2010年度からはじめた実践で様々な克服しなければならぬ課題もあったが、保護者と地域との連携のもとに、地域に根ざした学校教育実践として、画期的な取り組みである。

小学校での授業参観を親子で学ぶ公開講座に積極的に変えて、親が子どもの授業に積極的に主体性をもって参加していくということで大いに意味のある実践であった。

講座の内容も教師と保護者、地域の社会教育関係者と連携したものであった。公開講座として、学校からの社会教育実践としても新たな視点を提供している。

講座の内容をより地域文化の発展との関係が求められている。さらに、地域の文化、地域の教材を利用して、親子で学ぶことが、より子どもの学力向上に積極的に貢献していく教育方法の工夫などが、今後一層期待される場所である。

### 注

- (1) ジュン・デューイ、市村尚久訳「学校と社会、子どもとカリキュラム」講談社学術文庫142頁
- (2) 前掲書、144頁～145頁

### Summary

This paper analyzed the family of classroom study in school. This case deals Mimata school in Miyazaki Prefecture.

This practice is mutual cooperation of family and community. This school has made the day of class parents and children learn together. A local person is a lecturer. The teacher of the school plays a role of the coordinate. Children learn this practice happily. This class chooses one's favorite course. Here, the creation will of the child was excellent, too. The parent learns it with a child, too. The parent has sympathy with a child. The parent tasted pleasure to learn by oneself at the same time.

Practice of this school is cooperation activity with the adult education. It was proved that the figure which a parent learned made an effect of the learning in the school of the child.